

日本中國學會報 第七十二集
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

松崎慊堂の陶淵明享受について

——石經山房本『陶淵明文集』の刊行を中心に——

富 嘉 吟

松崎慊堂の陶淵明享受について

——石經山房本『陶淵明文集』の刊行を中心に——

富 嘉 吟

松崎慊堂は江戸後期の儒學者であり、『縮刻唐開成石經』（以下、『縮刻唐石經』）によつてその名は廣く知れ渡つてゐる。慊堂は經書に精通してゐるのみならず、集部の文獻にも造詣が深く、彼が漢詩文に親しんでゐた様子はその文集や日記の至る所で視られる。特に注目に値するのは、慊堂が一讀者として漢詩文を人生の肥やしとしただけであ

く、自ら漢詩文集の校訂・刊行にも携わり、江戸後期における漢詩文の流布において多大な功績を残した點である。なかでも、天保十一年（一八四〇）に刊行された石經山房本『陶淵明文集』（以下、『石經山房本』）はその代表的なものであり、慊堂ないし江戸後期の中國文學享受の諸相を視させる絶好の例である。

石經山房本については橋川時雄の『陶集版本源流考』（『雕龍叢鈔』本、文字同盟社、出版年不明）などの陶淵明集の版本系統に關する論著においてしばしば言及されているが、それらにおいては和刻本の一種として簡単に紹介されているのみで、その成立背景や意義が深く論じられてはゐないのが現状である。小論では『慊堂全集』（館森鴻校訂『崇文叢書』本、崇文院、一九二六、以下、『全集』）や『慊堂日曆』（濱野知三郎校訂『日本藝林叢書』本、六合館、一九二九、以下、『日曆』）ともに

『松崎慊堂全集』に收める、冬至書房、一九八八）などの資料を踏まえ、石經山房本の刊行を中心に慊堂の陶淵明享受について検討してみる。¹⁾

一、慊堂の陶淵明享受と「和陶詩」

慊堂の著作のうち、陶淵明に關する最も早いものは『全集』卷二所收の寛政六年（一七九四）四月に著された「送葛西子英序」である。慊堂は其中で、陶淵明を古代の「俊髦豪傑」の代表として擧げ、次のように著している（下線は筆者）。

自古俊髦豪傑之士、往往好酒焉。衛武公之初筵、孔夫子之無量、鄭康成之三百盃、陶靖節之種秫田。（中略）然孔子之無量、則曰不爲酒困。武公之初筵、則曰飲酒溫克。康成之不亂、靖節之到醉而止、此皆飲不盡量、醉不踰節、世所謂善飲者歟。

（古より俊髦豪傑の士、往々にして酒を好む。衛の武公の初筵、孔夫子の量無き、鄭康成の三百盃、陶靖節の秫を種うる田。（中略）然るに孔子の量無きは、則ち酒の爲に困しまざるを曰う。武公の初筵は、則ち酒を飲みて溫克なるを曰う。康成の亂れず、靖節の酔いに到りて止む、此れ皆飲みて量を盡くさず、酔いて節を踰えず、世の所謂る善飲なる者か。）

「陶靖節之種秫田」は『宋書』（中華書局、一九七四）卷九三「隱逸傳」所收の「陶潛傳」（以下、「陶潛傳」）を典拠としている。

公田悉令吏種秫稻。妻子固請種秫、乃使二頃五十畝種秫、五十畝種粳。

（公田悉く吏をして秫稻を種えしむ。妻子固く秫を種えんことを請い、乃ち二頃五十畝に秫を種え、五十畝に粳を種えしむ。）

「秫」は「稷之黏者（稷の黏る者）」であり、酒造用の穀物である（段玉裁『說文解字註』、中華書局、二〇一三、頁三二五）。豪快な飲酒者としての人物像は、慊堂の陶淵明享受に初めて描かれた一面であり、その人生を理解する最初の手がかりとなる。

なお、「靖節之到醉而止」は、「陶潛傳」の「我醉欲眠、卿可去（我酔いて眠らんと欲す、卿去るべし）」を典拠とするものであり、飲みすぎないために來客を見送る姿を描いている。ここで、慊堂は陶淵明を鄭玄などの聖賢と併稱し、酒に酔っても禮節を正しく守っているという点を強調している。これは確かに『詩經』以來の儒者が唱える飲酒の理想像であるが、陶淵明の作品に見られる飲酒表現からは、酒に耽溺する一面が強く読み取れ、從來の儒者とは異なる姿が見られる。慊堂が「送葛西子英序」に描くのは、陶淵明の人生觀というより、儒者である自分が抱く理想の投影と見なしたほうが無難であろう。

當時の慊堂はまだ二十二歳の若さであったので、陶淵明の豪快な飲酒生活にひたすら注目しているが、後の文化五年（一八〇八）、三十七歳になった慊堂が陶淵明の隱逸生活に興味を持ったことは、『全集』卷一六「戊辰正月五日與諸同人遊原川、和陶公斜川韻、是歲予三十七（戊辰正月五日諸同人と原川に遊び、陶公の斜川の韻に和す、是の歲予三十七なり）」（以下、「和斜川韻」）によって覗える。

松崎慊堂の陶淵明享受について

開歲三十七、容光不少休。適及靖節年、緬懷斜川遊。欣然命勝侶、言詠循清流。適物觀魚樂、息機隨鳴鷗。感被大峨人、考亭又山丘。（註、蘇文忠、朱文公竝和陶公是韻。）斯人雖云遠、勝踐庶足疇。飲水亦陶然、畢景況唱酬。悲歡固無門、詎必問可否。歎息柴桑翁、一醉以忘憂。佳辰良可撫、此外余無求。

（開歲三十七なり、容光少くも休まず。適ま靖節の年に及び、緬かに斜川の遊を懷う。欣然として勝侶に命じ、言詠清流に循う。物に適（かな）いて魚の樂しみを觀、機を息めて鳴鷗に隨う。大峨の人を感被し、考亭又た山丘。（註、蘇文忠、朱文公竝びに陶公の是の韻に和す。）斯の人は遠しと云うと雖も、勝踐庶くは疇するに足らんことを。飲水亦た陶然たり、畢景況や唱酬をや。悲歡固より門無し、詎ぞ必ずしも可否を問わん。歎息す、柴桑の翁の、一酔以て憂いを忘るるを。佳辰良に撫ずべし、此の外余は求むること無し。）

「斜川韻」は陶淵明「遊斜川」詩に使われている韻字であり、慊堂はこれに次韻して本詩を詠唱したのである。自然との觸れ合いを通じて陶淵明の心境を體驗し、人生にはそれ以外の望みがないと感嘆している。

「和斜川韻」は慊堂が早くから陶淵明集の本文に強い關心を持つていたことを表す一例として大變興味深い。周知のように、「遊斜川竝序」の序文と本文の年月表記については長く論が交わされてきた。以下、宋刻遞修十卷本『陶淵明集』（『中華再造善本』影印本、北京圖書館出版社、二〇〇三。以下、「宋遞修本」）を底本として當該部分を引用する（括弧内は原校記）。

序文…辛丑（一作酉）正月五日、天氣澄和（一作穆）、風物閑美。本文…開歲脩五十（一作日）、吾生行歸休。

陶淵明の生卒年について、「陶潛傳」には「潛元嘉四年（四二七）卒、時年六十三（潛は元嘉四年に卒す、時に年六十三なり）」とあり、それによれば、その生年は東晉の興寧三年（三六五）で、辛丑年（隆安五年、四〇二）には三十七歳であったことになる。しかし、「遊斜川竝序」にある「辛丑（歳）正月五日」「開歲修五十」に従えば、その生年は永和八年（三五二）となり、『宋書』との間に食い違いが生じる。「辛酉」「五日」の異文が現れたのは、『宋書』の記載と合わせるためであるとされている³⁾。

「和斜川韻」の詩題には「是歲予三十七」とあり、本文には「開歲三十七」とあるので、慊堂は『宋書』と「辛丑」の記載を信用して三十七歳説を採用したことが分かる。一方で、「開歲三十七」は明らかに「開歲修五十」の構文を模倣して自身の年齢を述べているものであり、三十七歳説との齟齬をきたす。當時の慊堂が所持した陶淵明集の版本に關しては、詳しい資料が残されていないが、明曆三年（一六五七）菊池耕齋點本（以下、「明曆本」とその後印本・後修本などは恐らく架藏していたと考えられる。後で觸れるように、慊堂は文化四年より前に、明曆本を重印した寛文本および重刻紹興本について論じていたことがある。調べたところ、寛文本では「辛丑」「開歲修五日」、重刻紹興本は「辛丑」「開歲修五十」となっている。つまり、慊堂は「遊斜川竝序」の異文と『宋書』との食い違いにすでに氣付いていたようであるが、「和斜川韻」において明確な判断を下してはいなかった。後ほど石經山房本の校訂に際して、この問題を再度取り上げて長年温めてきた結論を記述する。詳しくは第三節を参照されたい。

隱逸者としての陶淵明は、慊堂によってその人生の理想像と見なされて、その出處進退にも影響を與えた。『全集』巻首所收の「慊堂松

崎先生行述」には、次のように述べられている。

時肥後國主以先生其國民也、將請諸掛川侯復之。先生謂出女可
以改嫁、而嫠婦不可再醮。君臣夫婦、其義一矣。（中略）於是作「和
陶飲酒詩」二十首以示志。

（時に肥後國主、先生其の國の民なるを以て、將に掛川侯に請いて之を復せんとす。先生謂う、出女は以て改嫁すべきも、嫠婦は再醮すべからず。君臣夫婦、其の義一なりと。（中略）是に於て「和陶飲酒詩」二十首を作りて以て志を示す。）

ここでは、慊堂は陶淵明「飲酒詩」を唱和することを通じて舊主への忠實を表白し、出仕の要請を拒絶した。ところが、現存する『全集』巻一六には「和陶公飲酒」の一首しか収録されていない。その事情について、『全集』巻一一「題和陶公飲酒詩摘錄二首後」で次のように述べられている。

余作「和陶公飲酒詩」二十首、既廿二年矣。余既忘之、而佐君仲澤猶能記之矣。（中略）仲澤千里寄書、請錄一通以代北海之尊焉。余衰病之餘、勉強纔錄中二首以往。此詩當時聊自遣耳、不足以醒世。（中略）天保乙未十二月廿日。

（余「和陶公飲酒詩」二十首を作りて、既に廿二年なり。余既に之を忘るるも、佐君仲澤猶お能く之を記す。（中略）仲澤千里より書を寄せ、一通を録して以て北海の尊に代えんことを請う。余衰病之餘、勉強して纔かに中の二首を録して以て往かしむ。此の詩は當時聊か自ら遣るのみにして、以て世を醒ますに足らず。（中略）天保乙未十二月廿日。）

「天保乙未」は天保六年（一八三五）であり、「佐君仲澤」は蘭醫の佐々木中澤である。「既廿二年矣」によって、慊堂が「和陶公飲酒詩」二十首を作ったのは文化十一年（一八一四）の四十四歳の頃であること

が分かる。その二十二年後、再び佐々木中澤の要請を受けて二首を鈔寫したが、本来自ら慰めるために作ったものであり、それほど価値がないと述べている。『全集』に一首しか収録されていないのは、恐らく自ら削除したからであると推測される。幸いなことに、羽倉簡堂（用九）の『従吾所好』（早稲田大學圖書館藏嘉永四年本）巻下には序文及び十二首が収録されており、其の九は次の通りである。

北窓高臥人、千古留清風。激貪不在多、唯此三盃中。斯人猶飢、余豈論窮通。一發不可回、歸心滿數弓。

（北窓高臥の人、千古清風を留む。激貪は多きに在らず、唯だ此の三盃の中。斯の人すら猶お飢す、余も豈窮通を論せんや。一たび發すれば回すべからず、歸心滿數の弓。）

ここで、陶淵明の隱逸者としての一面と禮儀正しい飲酒者としての一面が統合されており、慊堂の陶淵明についての全體的な認識が分かる。また、慊堂は陶淵明の人生を通じて窮達への執着を反省し、山林の志を固めたことが覗える。慊堂が隱逸したのは、確かに「和陶公飲酒詩」二十首を作った年である。

以上のように、「和斜川韻」は慊堂のはじめての和陶詩であり、單篇のものであるのに對して、七年後の「和陶公飲酒詩」は二十首からなる連作である。そこで、彼の和陶詩への情熱が長い間にずっと衰えていないことが覗える。慊堂が和陶詩を作ったことに、隱逸者としての陶淵明の人格を尊敬し、その怡然自若な生活を敬慕する思いがまず読み取れるが、和陶詩という體裁自體は陶淵明の受容史における看過できない一大主題であり、慊堂の陶詩享受のありかたを知りうる手がかりになる。「和斜川韻」には「感被大峨人、考亭又山丘」とその自註の「蘇文忠、朱文公竝和陶公是韻」があり、慊堂が蘇軾や朱熹の和

陶詩を意識しながら新たなものを作ったことが覗える。後述の『須溪校本陶淵明詩集』でも、慊堂は朱熹の陶淵明に關する詩論を鈔寫している。林家の門人である慊堂にとつては、陶淵明に唱和することが詩才を伸ばすだけでなく、朱子學の一學徒として先師の教えに従うことに繋がったことも大變意義深かった。

日本における和陶詩と言えば、江戸時代の元政上人と、木下順庵の弟子である室鳩巢のものが挙げられるが、慊堂の和陶詩はそれらに續くものである。元政上人は『草山集』（立命館大學圖書館藏延寶二年本）往之卷「和陶淵明榮木詩」の「序文」において「和陶之韻述志云（陶の韻に和して志を述ぶと云う）」と述べており、和陶詩を通じて自分の志向を伝えていたことが分かる。室鳩巢に關しては、「自身の實感を伴った考えや決意が、陶淵明詩の次韻、模倣である「和陶詩」という「型」に託されて述べられている」とされている⁵⁶。慊堂も和陶詩によって人生の出處進退を詠唱し、さらに陶淵明の人格に魅了されて隱逸の身になった。慊堂の作品は元政上人と室鳩巢が作った和陶詩の内在的精神と同調しており、まさに彼らの作品の延長線上に置かれるべきものである。

なお、文政十三年（一八三〇）十二月十二日の『日曆』には、南畫家の谷文晁の弟子である横田（三好）汝圭が「和陶詩卷」を返却しに來たという記述があり、さらに天保二年（一八三一）三月四日には「千賀生携酒食來、持枝山和陶詩一幅去（千賀生は酒食を携えて來たり、枝山の和陶詩一幅を持ち去る）」という内容が書かれている。これらが言及しているのは、明の名高い書家の祝允明（號は枝山）が自ら陶詩に和して書寫したものであろう⁵⁷。そこで、晩年の慊堂の陶淵明への傾倒は單なる和陶詩の内容に留まらず、書道にまで及んで複合的な様態を

呈していたことが分かる。慊堂が石經山房本『陶淵明文集』の刊行にまで携わったことは、長年にわたる陶淵明とその詩文への憧れの表れであると考えられる。

二、石經山房本の刊行とそれをめぐる人々

慊堂がいつの時點で陶淵明集の刊行を決意したのかは不詳であるが、『全集』巻七「與卷大任書」には、

陶公集、是間寛文中所刻、惟一太歷中程氏刊本而已。是本蕪穢、每一披閱、信汚陶公面目。久欲會衆本定一善本、而年老無力、且近日世所最好在宋元古本。老眊所校、雖萃衆美、人亦視一程子耳。寛政・享和間、始得觀汲古閣影宋大字本、極佳。

(陶公の集、是の間の寛文中に刻する所、惟一太歷中の程氏刊本のみ。是の本蕪穢にして、一たび披閱する毎に、信に陶公の面目を汚す。久しく衆本を會(あつ)めて一の善本を定めんと欲するも、年老いて力無く、且つ近日世の最も好む所は宋元古本に在り。老眊の校する所、衆美を萃(あつ)むと雖も、人亦た一つの程子と視るのみ。寛政・享和の間、始めて汲古閣影宋大字本を觀るを得るに、極めて佳なり。)

とある。「寛文中所刻」なるもの(以下、「寛文本」としては、まず武村市兵衛が寛文四年(一六六四)に明曆本によつて重印したものが想起されやすいが、これは寛文年間刻本ではない。明曆本は明天啓二年(一六二二)に萬曆七年(己卯、一五七九)の蔡汝賢本を翻刻したものを底本とするものであり、「太歷中程氏刊本」の記述と合わない。これは明曆本の蔡汝賢跋と天啓二年刊記が寛文本では削られたので、付録末の萬曆十五年(一五八七)の休陽程氏の刊記を原刊記と誤解し、さらに「萬曆」を「太歷」と誤記したからである。

ところで、寛文本には本文を妄りに改變している箇所があるので、そこに慊堂は不滿に感じ、新しく校訂する意欲が湧いたが、體力が衰えたことと、宋元の古本を利用できなかったことが理由で作業は進まなかつたという。これは「寛政・享和間」以前の話であると考えられるが、當時の慊堂はまだ三十歳を越えたばかりで、とても「年老無力」とは言えない。これは恐らく言い譯であり、本當の原因は「宋元古本」を利用できなかったことであろう。

慊堂がいに宋元の古本を閲覽しえたのは、寛政・享和の間に始めて「汲古閣影宋大字本」を目撃した時のことである。これは後に石經山房本の底本として利用された汲古閣重刻の紹興年間蘇寫本(以下、「重刻紹興本」)であることは疑いない。重刻紹興本は確かに大字で刊行されており、「大字本」という特徴と合致している。ただ、慊堂は重刻紹興本の優れた所を認めたが、陶淵明集の校訂に關する話は以後しばらく途絶えた。文政の終わりから再びその話が始まり、『日曆』文政十年(一八二七)七月には「終日理陶靖節事(終日陶靖節の事を理む)」とあり、後の天保四年(一八三三)には『晉書』卷九四「隱逸傳」所收の「陶潛傳」を抄録した記録や、陶集を抄録・校訂した記録が頻繁に見られるようになる。當時利用した陶集の版本は明記されていないが、『日曆』天保四年五月八日には、

掖齋書來、貸『陶淵明集』影宋本、及致大字本影鈔『爾雅』、山本頤庵本也。

(掖齋の書來たり、『陶淵明集』影宋本を貸し、及び大字本影鈔『爾雅』を致す、山本頤庵の本なり。)

とあり、『陶淵明集』影宋本は慊堂が寛政・享和の間に閲覽した「汲古閣影宋大字本」即ち重刻紹興本と同版であると思われる。その

所藏者の山本頤庵は掛川藩の醫師であり、慊堂とは付き合いが深く、彼に藥を渡すことも時々あった。『杏雨書屋藏書目錄』（武田科學振興財團、臨川書店、一九八二）には頤庵の舊藏本が収録されており、その中には室生寺寫本から鈔寫された『日本國見在書目錄』や、師匠の多紀元簡の『藥性提要』を訂補して山本氏爲可堂から刊行されたものがある。多紀元簡は多紀氏の出身であり、その家族は醫學書の蒐集・覆刻に熱心に取り組んでいたことによつて廣く知られている。頤庵が貴重本を蒐集したり、自ら刊行を行つたりしたのは師の影響を受けたからであろう。さらに、彼と慊堂との交際にも、古書への愛という共通點が働いていると思われる。

ところで、慊堂が直接、頤庵から重刻紹興本を借用するのではなく、狩谷掖齋の關係を通じてそうしたのは、當時すでに掖齋がその本を架藏していたからであると思われる。『經籍訪古志』（宮内廳書陵部藏明治十八年活版）卷六に著録されている求古樓所藏の明刊覆宋大字本『陶淵明文集』十卷がそれであろう。なお、慊堂が刊行した影宋本『爾雅』にも狩谷掖齋の參與が見られ、掖齋は慊堂の考證學への傾倒に影響を與えたのみならず、その漢籍刊行も大いに手助けしたことが覗える。

また、同年の九月六日・九日には陶淵明集を校正する記載が次のように見られる。

（六日）朝禺校淵明集。

（九日）鈔陶公文集卷尾顏延之誄、及楊（ママ）、宋、思悅、無名氏題跋、以代今日泥路登高之況。

（六日）朝禺淵明集を校す。

（九日）陶公文集卷尾の顏延之誄、及び楊、宋、思悅、無名氏の題跋を

松崎慊堂の陶淵明享受について

鈔し、以て今日の泥路登高の況に代う。）

各篇目の順番が、重刻紹興本の卷末にある顏延之の誄、陽休之、宋庠、思悅および無名氏の題跋と一致することを考えると、慊堂が校訂に用いたのは山本頤庵舊藏の重刻紹興本であると推測できる。寛政・享和の間に初めて重刻紹興本を目にしてからすでに三十年以上が経ち、老境に入った慊堂が遙か以前に出會つた貴重本をついに手に入れて校訂を行い、宿願を叶えた時、その心はいかなる感激に溢れていたことだろう。後に石經山房本の底本として利用されたのも、その山本頤庵舊藏本であると考えられる。

重刻紹興本以外に、慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫には慊堂が鈔寫した朝鮮本『須溪校本陶淵明詩集』（以下、「須溪本」「須溪鈔本」）がある。須溪鈔本には市野光彦が著した「文化丁丑秋」の跋文が鈔錄されているので、その底本は『經籍訪古志』卷六の青歸書屋所藏の朝鮮國刊本であると推測される。市野光彦（迷庵）は江戸後期の町人學者の代表であり、早くから慊堂と友情を結んでおり、互いに古書の鑑賞などでよく交流していた。その跋文によると、市野光彦は遅くとも文化十四年（一八一七）には須溪本を入手していたので、これが須溪鈔本の底本に當たるものであると考えられる。

須溪鈔本の卷末には「天保四年重陽」に始まり、『日曆』九月九日條とほぼ同内容の識語があるので、その鈔寫は天保四年九月に完成されたことが分かる。また、須溪鈔本は朝鮮本、即ち韓本を底本とし、同年二月十七日の日記には「鈔韓本陶詩數首（韓本陶詩數首を鈔す）」という記載があるので、その鈔寫は遅くとも天保四年二月から始まつたと推測される。そこで、慊堂が須溪本を鈔寫した時期は、重刻紹興本を校訂した時期とちやうど重なっていることが覗える。實は須溪鈔

本の本文行間には、「宋本」と「程本」による朱墨校語が至る所に見られる。「程本」は前述の「太歷中程氏刊本」を底本とする寛文本である。「宋本」と重刻紹興本を照合してみると、これは重刻紹興本の本文あるいは割注にある「宋本」即ち宋庠本であることが確認される。なお、須溪鈔本巻中の末尾にある「戊戌臘七再校定（戊戌臘七再校定す）」という一文によつて、天保九年（一八三八）の年末に再校訂したことが分かる。

慊堂は陶淵明集二種の校訂を行うと同時に、その刊行の手配も日程に入れていた。ここで最も言及するに値するのは、友人の巻大任（號は菱湖、弘齋）に版下の書寫を依頼したことである。掖齋から重刻紹興本を受け取つた六ヶ月後、天保四年十一月十四日の日記には、「淵明、巻大任」という意味不明な一文があるが、これは彼に版下執筆を頼むというメモであろう。實際翌天保五年正月二十九日に「菱湖約爲余寫靖節集」（菱湖余の爲に靖節集を寫さんことを約す）とある。後の天保六年八月十七日には「訪卷弘齋託陶集（卷弘齋を訪ねて陶集を託す）」と記され、菱湖に書寫を依頼したことが明記されている。

周知のように、重刻紹興本が現存唯一の傳蘇軾手寫本『陶淵明文集』であり、その價值は高く評價されている。慊堂が石經山房本の刊行にあたってわざわざ書の名手の菱湖に依頼したのは、重刻紹興本を模倣するためであると考えられる。慊堂は「與卷大任書」で、菱湖の快諾を受けた喜ばしさを次のように述べている。

與賢兄言此事、誤蒙採取、欲許以親筆刊行、僕之喜可知也。（中略）以不世出之字傳陶公集、於陶公亦足洗近日塵垢面目、而世之得而讀之者亦可賀也。

（賢兄と此の事を言い、誤りて採取を蒙り、親筆を以て刊行することを

許さんと欲す、僕の喜び知るべきなり。（中略）不世出の字を以て陶公集を傳うるは、陶公に於いても亦た近日塵垢の面目を洗うに足り、世の得て之を讀むものも亦た賀すべきなり。）

「近日塵垢面目」は、當時の日本で流布していた陶淵明集の諸版、特に前述の「每一披閱、信汚陶公面目」の寛文本への不満を言い表している。菱湖は慊堂の要望を引き受けたが、天保六年八月から天保七年（一八三六）四月までの『日曆』には、慊堂が菱湖に催促する記述が何度も見られる。また、「與卷大任書」には、

但賢兄善飲似陶公、多不事事。則快事如此、亦付之悠悠、而使衰老之僕日日烏邑者、可恨耳。『道德經』五千言、義之爲道士寫、半日閒耳。又趙王孫翰墨妙世、猶懼鮮于伯幾云、伯幾早死、使余輩無佛處稱尊也。又云、伯幾墨妙之極、日作小楷三萬字。吾晚能作一萬字耳。賢兄、今日伯幾也、子昂也。此集不過三萬字、能如伯幾、一日可了、能如子昂、三日可了耳。

（但し賢兄の善飲は陶公に似て、多く事をせず。則ち快事此くの如きも、亦た之を悠悠に付して、衰老の僕をして日日烏邑せしむるは、恨むべきのみ。『道德經』五千言、義之道士の爲に寫すこと、半日閒のみ。又た趙王孫の翰墨世に妙なるも、猶お鮮于伯幾を懼れて云く、伯幾早く死に、余輩をして佛無き處稱尊せしむるなりと。又た云う、伯幾墨妙の極み、日に小楷三萬字を作る。吾晚に能く一萬字を作るのみ。賢兄、今日の伯幾なり、子昂なり。此の集三萬字を過ぎず、能く伯幾の如くんば、一日にして了るべく、能く子昂の如くんば、三日にして了るべきのみ。）

とある。慊堂は菱湖のことを王羲之、趙孟頫、鮮于樞らに喩え、仕事を早く終わらせるよう彼を説得したかったが、『日曆』天保九年十二月十六日には、

萩原只助返陶集書板費二圓金、而歎於心可奈何。

(萩原只助陶集の書板費二圓金を返すも、心に歎(あきた)らなきを奈何(いかん)すべき)

という一文がある。萩原只助は菱湖の弟子の萩原秋巖である。この「陶集書板費二圓金」は、恐らく菱湖が石經山房本の書寫をうまく進められず、潤筆料を返したという記事であると推測される。

さて、石經山房本の書寫は結局どうなったのか。『全集』巻一二「題陶淵明集後」には、

自序目至第三卷首、老友卷子大任臨。自第三卷二頁至第六卷之半、小島氏知足臨。自六卷之半終第八卷、學子三浦汝楫臨完。

(序目より第三卷首に至るまで、老友卷子大任臨す。第三卷二頁より第六卷の半ばに至るまで、小島氏知足臨す。六卷の半ばより第八卷に終るまで、學子三浦汝楫臨し完る。)

とあり、石經山房本の書寫が結局、菱湖と小島成齋(知足)、三浦汝楫の三人に分擔された形になったことが分かる。小島、三浦の二人は同時期に慊堂が主事した『縮刻唐石經』の書寫にも携わった人物であり、彼らは菱湖の作業が豫想通りに進捗しなかつたために、改めて頼まれたと考えられる。

慊堂が石經山房本の書寫を卷菱湖に依頼した一方で、その題序を師匠の林述齋に託したことは、巻頭に置かれた林述齋が天保十一年「小春(陰曆十月)に題したもの(以下、「題序」)によって分かる。その中で、

既訂定六藝經本以貽後生、又以孔子興於詩之旨、採陶謝之佳本以繼之。

(既に六藝の經本を訂定して以て後生に貽り、又た孔子の詩に興るの旨

松崎慊堂の陶淵明享受について

を以て、陶謝の佳本を探りて以て之に繼ぐ。)

とある。「六藝經本」は無論『縮刻唐石經』であり、「陶謝之佳本」は『三謝詩』を附する石經山房本である。述齋は石經山房本を『縮刻唐石經』と並列し、同じく儒家の教化を反映するものであると論じている。

石經山房本には天保十一年の題序があるが、『日曆』には同年の十一月五日まで「夜校陶集(夜に陶集を校す)」の記載があり、慊堂が石經山房本の上梓まで倦まず弛まず校訂を行っていたことが覗える。そして、自分の心血を注いだ石經山房本が出来上がって最初に渡した相手は、やはり師匠の林述齋にほかならなかつた。『日曆』天保十一年十二月十四日には、

過師門、二公登衙不在、呈賀餅及陶集、書懷詩。

(師門に過ぎるも、二公登衙して在らず、賀餅及び陶集、書懷詩を呈す。)とあり、「二公」は林述齋とその息子の櫻宇である。ここで、慊堂が石經山房本を歳暮のお祝いの餅とともに述齋親子に進呈したことが分かる。その後も石經山房本をよく親友に贈り、追加印刷するまでに至った。

三、石經山房本の底本・校訂とその意義

陶淵明集は由緒正しく傳來してきた数少ない六朝時代の別集の一つである。宋代に入ると、宋庠本とその後の思悅本という新しい整理本二種が世に現れ、その版本系統の基礎を築き上げた。宋庠本も思悅本も現存しないが、前述の宋遞修本や紹熙三年(一一九二)曾集刻本『陶淵明詩』、元刻本『箋註陶淵明集』など、その流れを汲む宋元刊本は現存する。

慊堂が宋代諸本のうち、思悦本に最も高い評價を與えたことが、「題陶淵明集後」の冒頭で次のように見られる。

陶公淵明集實爲風騷亞匹、故後世傳刻尤多。要之、北宋治平中思悦所校爲最古善本。(中略) 故予校陶集、一依思悦本。

(陶公淵明集は實に風騷の亞匹たり、故に後世に傳刻すること尤も多し。之を要するに、北宋治平中の思悦の校する所は最古の善本たり。(中略) 故に予陶集を校するに、一に思悦本に依る。)

慊堂が思悦本を「最古善本」と評價し、それを校訂の底本としたことがここに覗える。

思悦の「書靖節先生集後」には「時皇宋治平三年五月望日」という日付があるので、「治平本」とよく略稱されている。石經山房本の扉紙には「縮臨治平本」と題され、これ以降の漢籍目録でも石經山房本は「縮臨治平本」と著録されていることがほとんどであるが、すべて誤りである。「題陶淵明集後」には、

顧其原本今不可復得、而近世汲古閣所模雕南宋紹興本、係其重刻、又傳爲東坡先生板書。

(顧だ其の原本今復た得べからざるも、近世汲古閣模雕する所の南宋紹興本、其の重刻に係り、又た傳えて東坡先生の板書と爲す。)

とある。つまり、思悦本は散逸してしまったので、慊堂が利用したのは前述の重刻紹興本である。重刻紹興本は思悦本所收の陶詩元號に関する議論を収録しているので、その一部は思悦本まで遡ることができると考えられる。これが、慊堂が紹興本を思悦本の重刻であると判断し、石經山房本を「縮臨治平本」と呼ぶ理由であろう。ところが、卷末所收の紹興年間の刊語には、

僕近得先生集、乃群賢所校定者。

(僕近く先生の集を得るに、乃ち群賢の校定する所の者なり。)

とある。これによって、重刻紹興本の本文は複数の人の校訂を總合したものであると分かり、思悦一人で校訂した思悦本と同一視できないことには贅言を要しない。

しかも、紹興本に十八年先だつて蘇體寫刻本『陶靖節集』がある。宣和四年(一一二二)の王仲良刊本(以下、「宣和本」)がそれである。宣和本は現存しないが、胡仔『苕溪漁隱叢話後集』(人民文學出版社、一九八二)卷三および宋遞修本の卷末所收の「曾紘說」によつてその様子はある程度覗える。そして、重刻紹興本は今知りうる宣和本の特徴と一致するので、宣和本を覆刻した可能性が高いとされている(郭紹虞、頁二七四)。「苕溪漁隱叢話後集」所收の宣和本「後序」には「陶集行世數本、互有舛訛、今詳加審訂(陶集世に行わるる數本は、互に舛訛有り、今詳らかに審訂を加う)」とあることから、宣和本は當時流布していた數本を踏まえて校訂されたものであり、その流れを汲んだ重刻紹興本は治平年間に成立した思悦本ではないことが改めて確認される。

前述の通り、慊堂は天保四年前後、すでに寛文本、須溪鈔本、重刻紹興本など複数の刊本と鈔本を持つていた。特に須溪鈔本の底本である須溪本は成化十九年癸卯(一四八三)の刊行であり、重刻紹興本にも劣らぬ價值があると認めざるを得ない。慊堂は須溪鈔本において寛文本と重刻紹興本によつて丁寧な校訂を行ったが、最後に重刻紹興本を石經山房本の底本としたのは、それを北宋時代の思悦本の重刻と見なし、甚だ貴重であると考えていたからであろう。

慊堂は重刻紹興本を思悦本の重刻と間違えたが、その優れたところをよく認識して「題陶淵明集後」において次のように述べている。

前於思悅諸本異同、皆備於思悅本。後於思悅諸刻異同、釐以思悅本、紕繆脫漏、一一可辨。(中略) 文字雋朗尤可喜、而卷冊重大、不便挾帶、故擇良史、縮臨傳刻。

(思悅より前の諸本の異同、皆思悅本に備わる。思悅より後の諸刻の異同、釐むるに思悅本を以てすれば、紕繆脫漏、一一辨ずべし。(中略) 文字の雋朗は尤も喜ぶべきも、卷冊重大にして、挾帶に便ならず、故に良史を擇び、縮臨して傳刻す。)

つまり、重刻紹興本は異文を補充的に収録しており、それに先立つ陶淵明集の校訂成果を受け継ぎ、それに續く諸版の正誤を見分けるのに役立つ貴重さがある。これは重刻紹興本所收の思悅の「書靖節先生集後」の「愚嘗採拾衆本以事讎校(愚嘗て衆本を採拾して以て讎校を事とす)」という一文にある見解であろう。また、重刻紹興本の美しい書寫を高く評價し、その刊行の藝術的價值を重視している一面も見られる。

慊堂の評價自體はなお検討する餘地があるが、重刻紹興本には異文が數多く収録されており、また、寫刻の宋本の様子を伝える唯一の版本としてその價值が認められる。蘇軾の書寫か否かは疑問であるが、蘇軾は和陶詩を數多く殘しており、彼に關連する陶淵明集は陶詩の受容史においてこの上なく大切な意義を持つものである。前述のように、慊堂の和陶詩は蘇軾・朱熹を意識しながら作られたものであり、これも蘇軾の書寫と伝えられる重刻紹興本を、石經山房本の底本とする一大理由になると考えられる。

また、慊堂が須溪鈔本を石經山房本の底本としないのは、これは陶淵明の詩集であり、文などを収録しない方針をとっているからである。須溪鈔本の目録および本文には、慊堂が「宋刊十卷本系の本によ

つて賦辭記傳贊述傳贊疏祭、集聖賢群輔錄竝に諸本の跋を手寫し附綴した」内容があり、その不備を補う意圖が感じ取れる。それに對して、重刻紹興本は宋刊十卷本系のものであり、陶淵明の詩文を漏れなく収録しているので、石經山房本の底本として最適であると思われる。

なお、國立公文書館所藏の元刊李公煥註『箋註陶淵明集』(以下、「李公煥本」)は、市橋長昭が文化五年(二一八〇八)に昌平坂學問所に獻上した宋元版三十種の一つに數えられる。李公煥本には宋の張績が著した『吳譜辨證』が引用されたことがあり、僅かだが現存唯一の『吳譜辨證』の佚文である。須溪鈔本の欄外には張績の文が引用されており、しかも李公煥本の所收と一致するので、慊堂は李公煥本を一度見たことがあると推察される。ところが、前述のように、慊堂が陶淵明集の校訂に着手したのは天保四年であるので、當時はすでに隱退していて、學問所の所藏本を利用する條件は揃っていなかったと考えられる。それに對して、重刻紹興本は比較的に入れやすいように、汲古閣の見事な彫版技術によつて宋本の様態がよく伝えられており、宋本と同一視されてもよいほどの高い價值を有する。

慊堂は重刻紹興本を石經山房本の底本としたが、一部の篇目の眞偽については疑念を持った。まず、『集聖賢群輔錄』について、「題陶淵明集後」には、

第九、第十爲『集聖賢群輔錄』所謂『四八目』也。(中略)而近世所定『四庫全書』以爲依託、黜之子部類書内、是也。故今亦刪之。

(第九、第十は『集聖賢群輔錄』の所謂『四八目』たり。(中略)近世定むる所の『四庫全書』は以て依託と爲し、之を子部類書の内に黜く

るは、是なり。故に今亦た之を刪る。）

とあり、四庫館臣がそれを依託とする意見に賛同し、石經山房本を刊行する際にも重刻紹興本の卷九、卷十所收の『聖賢群輔錄』を削除することになった。

また、「孝傳贊」について、「題陶淵明集後」には、

如其「孝傳贊」與上文「扇上畫贊」「讀史」九章、俱是一類。

雖昭明本失載、亦當入集部。而『全書』同「群輔錄」一齊刪去、非也。陶公既是忠臣孝子、於所錄五孝之人亦皆有意思。諷讀之際、油然可以興學者孝思。縱是依託、亦所不忍刪、故謹存之。

（其の「孝傳贊」と上文の「扇上畫贊」「讀史」九章との如きは、俱に是れ一類なり。昭明本失載すと雖も、亦た當に集部に入るべし。而るに『全書』は『群輔錄』と同じく一齊に刪去するは、非なり。陶公既に是れ忠臣孝子、錄する所の五孝の人に於ては亦た皆意思有り。諷讀の際、油然として以て學者の孝思を興すべし。縱い是れ依託なるも、亦た刪するに忍びざる所、故に謹しみて之を存す。）

と述べており、「孝傳贊」は前卷末尾の「扇上畫贊」「讀史」と同じ種類のものであり、集部に入れるべきだと主張している。依託であつても教化的な効果があり、結局は石經山房本に保留されている。

篇目を削除した以外は、慊堂は須溪鈔本などによつて丁寧な校訂を行い、陶淵明集の本文校訂に對して強い意欲を有していることが覗える。「題陶淵明集後」には、重刻紹興本の本文三例を擧げてその正否を論じている。例一は「贈長沙公族祖序」に關する考證であり、その内容は須溪鈔本の「贈長沙公族祖序」の書き入れを寫したものである。例二は前述した「遊斜川竝序」に關する考證であり、その一部は次の通りである。

然以五十七歲、詩云開歲修五十、語涉歌後、當破作癸丑。是歲、公滿五十歲、罷官既八年矣。（中略）如改爲五日、不但與序文五日相重複、全首興象亦索然也。後來諸刻、皆從馬永卿所引廬山東林繆本、此亦杜杜孟八郎矣。

（然るに五十七歳を以て、詩に「開歲修五十」と云うは、語歌後に涉ればなり、當に破りて癸丑に作るべし。是の歲、公は滿五十歳、官を罷めて既に八年。（中略）如し改めて五日と爲せば、但だ序文の五日と相い重複するのみならず、全首の興象も亦た索然たり。後來の諸刻、皆馬永卿の引く所の廬山東林の繆本に従うは、此れ亦た杜杜孟八郎なり。）

前述のように、慊堂は文化四年にすでに「遊斜川竝序」の異文に氣付いていたが、ここで初めて自分の見解を詳しく書き下した。結局、慊堂が採用したのは、現存諸本のいずれにも見られない「癸丑歲」である。その結論自體の正否はさておき、慊堂の學風には考證學者としての精密性がある一方で、詩人としての直感に任せた大膽な一面もあることが覗える。例三の卷五「歸去來兮辭」の「農人告我以春」に關する考察でも、諸本の「春下擠入及字（春の下に及の字を擠入す）」の異文に反對し、「以意屬讀自妙（意を以て屬讀すれば自ら妙なり）」と主張しており、その自由な學風がはつきり感じ取れる。

残念なことに、慊堂は陶淵明集の本文の校訂・考證を行つていたが、結局石經山房本にはその痕跡がまったく見られない。ただ、重刻紹興本の避諱による缺畫を復元することがあつたが、これは『縮刻唐石經』にも見られる刊行規定であり、讀者の便宜を圖るためであつたと考えられる。校訂を施さない理由について、慊堂は「題陶淵明集後」の末尾で次のように述べている。

余嘗欲以是例比衆本作考異、頭緒頗多、衰邁荏苒。既而思之、

夫子以多聞闕疑、爲學問實際。諸葛於書、又獨觀大略、與此老讀
書不求甚解、先達自有神解。何又區區生此蕪穢、招具眼者笑乎。
今既定是策、爲最古善本。後之君子、儻取以訂晚出諸本、自知余
言之不誤耳。

(餘嘗て是の例を以て衆本を比べて考異を作らんと欲するも、頭緒頗る
多く、衰邁在再たり。既にして之を思う、夫子は多く聞き疑わしきを闕
くを以て、學問の實際と爲す。諸葛の書に於けるや、又た獨り大略を觀
るのと、此の老の讀書して甚だしくは解するを求めざるとは、先達自ら
神解有ればなり。何ぞ又た區區して此の蕪穢を生じ、具眼の者の笑いを
招かんや。今既に是の策を定めて、最古の善本と爲す。後の君子、儻し
取りて以て晚出の諸本を訂すれば、自ら餘の言の誤らざるを知るのみ。)

つまり、慊堂は重刻紹興本の價値をよく認めており、校訂を加えると
かえつてその價値を損すると確信している。これも『縮刻唐石經』
「跋文」にある「從多聞闕疑之訓、不必強爲之說(多聞闕疑の訓に従い、
必ずしも強いて之が説を爲さず)」と相通じるものがある。陶淵明集の校
訂成果が石經山房本に反映されていないことは極めて遺憾であるが、
慊堂が貴重な文獻を本來の姿で保存し、流布せしめた苦心がよく理解
できよう。

なお、石經山房本には『三謝詩』が付されており、また、卷末には
天保十一年に作られた「題三謝詩後」がある。石經山房本に先立つ陶
謝の合刊本と言えば、曹陶謝三家詩本『陶靖節集』や乾隆年間の陶謝
四家詩本『陶彭澤詩』が擧げられる(郭紹虞、頁三二三)。慊堂は言及
しないが、石經山房本に『三謝詩』を附したのは、大陸の風習の影響
を受けたからであると考えられる。

むすび

陶淵明の詩文は早くも平安時代から日本に傳來し、上代漢詩や五山
文學に深い影響を與えた。『日本國見在書目錄』には『陶潛集』十卷
が見られるが、和刻本の刊行は江戸時代に入って初めて世に現れた。
現存する最も早いものには、明曆三年本『陶靖節集』とその重印本・
後修本などがあり、これらは日本における陶淵明集の流布にそれなり
の功績を収めている。しかし、明曆本の底本になつた蔡汝賢本は明の
萬曆年間のものであり、石經山房本が利用した重刻紹興本とは比べも
のにならない。したがつて、石經山房本は明曆本に遅れて刊行された
ものではあるが、和刻本陶淵明集の最善本であることには贅言を要し
ない。

石經山房本が和刻本陶淵明集の最善本になれたのには、まずその刊
行を主事した慊堂の功績によるものが認められる。慊堂は若い頃から
陶淵明の詩文に心酔し、その高潔な人格を尊敬していた。さらに、和
陶詩を通じて自分の志向を表明しており、慊堂の人生が陶淵明からい
かに大きな影響を受けていたかが覗える。石經山房本の成立背景に
は、慊堂の陶淵明への愛好が最も大切な要因としてある。

石經山房本の刊行の背後には、慊堂の親友の大きな支えがある。底
本になつた重刻紹興本は、狩谷掖齋から借りたものである。また、慊
堂は市野光彦所藏の須溪本を鈔寫・校訂したものの、結局は石經山房
本に利用してはいないが、陶淵明集の版本系統についての認識を深め
る一助になつた。さらに、その版下は友人の巻菱湖と『縮刻唐石經』
に參與した小島成齋と三浦汝楫によつて書寫されている。なお、石經
山房本の題序は、當時の大學頭で慊堂の師匠でもあつた林述齋が著し

たものである。このように、石經山房本の刊行は慊堂一人による偉業ではなく、その親友の協力を得て初めて成立したことが確認できる。特に狩谷掖齋らは江戸後期の考證學と書誌學の勃興・發展に加わった人物であり、石經山房本もその新しい學風の下で成立したものであると考えられる。慊堂が長年精力を注いで成し遂げた校訂成果を放棄し、底本に最も近い形で刊行したのは、石經山房本が従來の和刻本と異なり、實證主義に基づいて成立したのだからであろう。

前述のように、慊堂が陶淵明に傾倒したのには、儒者としての理想像を見たこともあり、その和陶詩の作成にも先賢の朱子の教えに従おうという意圖がある。そこで、石經山房本の刊行は單に漢詩を樂しむためだけに留まらず、儒家の詩教を施す目的も大きかったと思われる。特に石經山房本は同時期に刊行された『縮刻唐石經』と同じく縮刻という技術を用い、その刊行の方法もよく通底している。さらに、その書寫を分擔した小島成齋と三浦汝楫は『縮刻唐石經』にも參與した人物である。なお、『日曆』天保十三年六月二十二日には、「以陶集納澁谷聖廟（陶集を以て澁谷聖廟に納む）」とあり、この「澁谷聖廟」とは澁谷の孔子廟であろう。慊堂が石經山房本を孔廟に奉納したのは、まさに林述齋が評價するように、これが孔子の「興於詩」の旨に従つて刊行されたものだからである。つまり、石經山房本の刊行は同時期の『縮刻唐石經』と同じように、慊堂による儒家の先賢への敬慕と詩教という理念への賛同がその背後にあり、両者は内在的に連係していると考えられる。

なお、慊堂が官版の刊行によく關與していたことは知られているが、官版で朱熹が高く評價した陶淵明集を刊行しなかった。これは官版集部の刊行が文政末期から激減²⁰⁾、その餘裕がなかったからである

う。石經山房本が縮印で携帯に便利であり、教科書として相應しかったので、官版の肩代わりとして刊行された意味もあつたかもしれない。つまり、石經山房本は私的な出版でありながらも、官版と連携していたことが推測される。

注

- (1) 一部の異文の検討を除き、小論が引用する陶淵明の詩文は全て石經山房本に従う。
- (2) 例えば、卷三「止酒」には「平生不止酒、止酒情無喜」とある。
- (3) 袁行霈『陶淵明集箋註』（中華書局、二〇〇三）卷二「遊斜川一首」校勘（一）を参照されたい。
- (4) 長澤規矩也・長澤孝三『和刻本漢籍分類目録（増補補正版）』、汲古書院、二〇〇六、頁一六四。
- (5) 蕭統「陶淵明傳」の末尾には、「朱子曰、作詩須從陶柳門中來乃佳。不如是、無以發蕭散沖澹之趣、不免局促塵埃、無由到古人佳處。」又曰、陶淵明詩平淡出於自然、後人學他平淡、便去遠矣（後略）。と鈔寫している。
- (6) 山本嘉孝「室鳩巢の和陶詩」、『アジア遊學』二二九號、勉誠出版、二〇一九、頁七一・七五。
- (7) 祝允明『懷星堂集』（『文淵閣四庫全書』本）卷三に「和陶淵明飲酒」二十首があり、その詩冊幾種かが現存している。
- (8) 小論が利用したのは國立國會圖書館藏重刻紹興本である。
- (9) 『日曆』天保四年二月十七日「鈔韓本陶詩數首。」天保四年二月二十八日「手鈔陶詩畢。」天保四年二月二十四日「校陶詩一冊。」天保四年二月二十五日「終日理陶詩一過、甚樂也。」天保四年三月三日「諸生謁、畢

寫陶靖節、當今日修禊、夜召諸生與酒。」などがある。

- (10) 矢島明希子「松崎慊堂校刊影宋本『爾雅』について」（『斯道文庫論集』第五四輯、二〇二〇）参照。

- (11) 吉田篤志「近世後期の考證學」（『近世の精神生活』、大倉精神文化研究所編、續群書類従完成會、一九九六）参照。

- (12) 底本は「□」に作るが、『東洋文庫』本（山田琢譯註、平凡社、一九七〇～一九八三）によって補正する。

- (13) 『日曆』天保六年九月二十七日「大槻土廣來、屬釋詞分寫、及促菱湖寫陶集。」「過弘齋、促陶淵明集。」天保七年二月二十六日「使文蔚往取弘齋所寫陶集、伊云、必持入山自致。」天保七年四月十四日「訪弘齋、陶集未寫上、語至初更辭去。」

- (14) 『縮刻唐石經』「跋」には、「各經首卷、友人小島知足所臨、第二卷以下學子河瀬汝船、三浦汝楫臨完。」とある。

- (15) 『日曆』天保十三年十二月十四日「命印陶集十部。」

- (16) 郭紹虞「陶集考辨」、『照隅室古典文學論集』、上海古籍出版社、一九八三、頁二七一。以下、本文中に「郭紹虞、頁〇〇」とあるのはこれによる。

- (17) 『濱野文庫并近菟本展觀書目錄』創立二十周年記念、慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫、一九八〇、頁一九。

- (18) 長澤孝三『幕府のふみくら』、吉川弘文館、二〇一二、頁一四〇。

- (19) これは宋の吳仁傑が著した『陶靖節先生年譜』の誤謬を訂正するものである。

- (20) 顧農「馬永郷論陶淵明」（『中華讀書報』、光明日報報業集團、二〇一七年三月二十二日）参照。

- (21) 『佛祖歷代通載』（國立國會圖書館藏五山版）卷一九「荊門玉泉皓長老塔銘」には、「師叱曰、杜杜。又曰、孟八郎孟八郎。」とある。丁福保

『佛學大辭典』（文物出版社、一九八四）によると、「孟八郎」は行儀の悪くて亂暴な人の代名詞である。「杜杜」の意味は収録されていないが、「孟八郎」の同意語であろう。

- (22) 『縮刻唐石經』「例言」には「唐諱缺筆者、依字填之」とある。

- (23) 『日本教育史資料』第一卷（文部省總務局、一九八〇）所收の明治十四年（一八八二）の「舊藩學政ノ儀ニ付舊大參事平野知秋ヨリ家令依田柴浦ヘ回答書」を参照されたい。

- (24) 市川任三「松崎慊堂と官版」、無窮會『東洋文化』復刊三〇～三二合併號、一九七三・五。

- (25) 福井保「昌平坂學問所官版分類目錄」（『江戸幕府刊行物』、雄松堂出版、一九八五、頁一四八）参照。

- (26) 堀川貴司「官版集部について」、『國語と國文學』特集號「近世後期の文學と藝能」、二〇一四、頁一四一～一四二。

*本研究はJSPS科研費19K13074の助成を受けたものです。